

細菌兵器感染者「2万6000人」

731部隊の極秘文書

京都で発見

旧日本陸軍七三一部隊が日中戦争当時、細菌兵器を六つの作戦で使い、感染者は二次感染を含め二万五千九百四十六人に上ったことを示す極秘文書が見つかったと、市民団体が十五日、東京都内で記者会見して発表した。

市民団体は「七三一・細菌戦部隊の実態を明らかにする会」(東京)メンバーが国立国会図書館関西館(京都府精華町)に収蔵されている資料を発見した。同会によると、資料

は陸軍軍医学校防疫研究室に勤務していた軍医の極秘報告書。七三一部隊が一九四〇年から四二年にかけて、中国吉林省や浙江省、江西省などで、ペスト菌に感染したノミを散布した際の記録が残されている。散布した日付やノミの量、一次感染者と二次感染者の数などが記載されていた。

会見したメンバーの松村高夫慶応大名誉教授は「旧日本軍が細菌兵器を使用し、データを集めていたことが判明した。細菌戦に協力したこの軍医は戦後、大手製薬会社に勤務しており、医師と戦争の関わりを考える上でも貴重な資料」と話している。

七三一部隊は旧日本陸軍が中国東北部(旧満州)のハルビン郊外に置いた部隊。多数の中国人やロシア人らを「丸太」と呼び、生体実験も行ったとされる。

■細菌兵器使用「調査を」

旧日本軍が中国で細菌兵器を使用したことを示す軍医学校内の極秘資料を発見した市民団体「731・細菌戦部隊の実態を明らかにする会」代表の松村高夫慶応大名誉教授らが15日、都内で記者会見した。「証拠がない」として細菌戦の存在を認めない政府の姿勢を松村代表は批判し、「同様の資料はほかにもあるはずで、政府はきちんと調査をするべきだ」と述べた。